福澤諭吉の『帳合学のすすめ』

（商学部）　三代川正秀

帳合学

文明開化の黎明期、この国の青年たちを鼓舞した書物に、「天は自ら助くる者を助く」に始まる中村正直訳『西国立志編』(明治 4 年 7 月”Self-Help,with Illustrations Character and Conduct” by Samuel Smiles)がある。次いで「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言へり」という名言で周知の福澤諭吉著『学問のすゝめ』がある。これは明治 5 年 2 月の初編出版に始まり最終編第十七が刊行されたのは同 9 年 11 月です。

これら二書は自助の精神と学問を身に着けることで封建制身分制度を脱して、立身出世を目指す西洋合理主義を説いたものでした。『学問のすゝめ』初編は続けて「万人は万人皆同じ位にして…生まれながらの貴賤上下の差別なく、…ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり冨人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり。学問とは、…世上に実のなき文学を言うにあらず…人間普通日用に近き実学なり、譬(たと)えば、…帳合の仕方、算盤の稽古、天秤の取扱い等を心得、」と述べて、「二編」でも再度「帳合も学問なり、時勢を察するもまた学問なり、何ぞ必ずしも和漢洋の書を読むをもって学問と言うの理あらんや。」と書いています。

福澤はこれからの学問(サイアンス)(実学)の代表として「帳合学」を名指しました。その『帳合之法』巻之一「凡例」には「帳合ノ法ヲ學ハシメナバ始テ西洋實學ノ實タル所以ヲ知リ…帳合モ一種ノ學門タルハ此譯書ヲ見テ既ニ明白ナリザレバ商賈モ學問ナリ工業モ學問ナリ」とあって、福澤の帳合学への意気込みが聞こえてきます。

『学問のすゝめ』初編出版は明治 5 年 2 月に発行され、最終編となる第十七は同 9 年 11 月です。福澤訳『帳合之法』初編(略式の部)は明治 6 年 6 月、二編(本式の部)が出版されるのが 7 年 6 月です。

このように同じ時期に同じ著者が、同時並行的に二つの異なる著書を世に問うています。『帳合之法』は、単に簿記の技術を教えるために書かれたのではなく、『学問のすゝめ』と同じ精神において、古い学問観では学問でないかのごとく見られてきた「帳合」なるものを新しい学問の一つとして、世人に説くために書いたもので、『帳合之法』はまさに『帳合学のすすめ』とでもいえるものです(黒澤清著『日本会計制度発展史』在経詳報社 p.45 参照)。

洋学事始め

福澤の『帳合之法』が世に出た明治 6 年に別の翻訳簿記書二冊がこの国に紹介されました。福澤諭吉訳『帳合之法』(慶應義塾出版局)は、H. B. Bryant, H. D. Stratton, and S. S. Packard, ***Bryant and Stratton's Common School Book-keeping***; embracing Single- and Double-Entry,　New York,1871.の翻訳でした。

英国で出版された William Inglis 著作(*Book-Keeping by Single- and Double-Entry.* London and Edinburgh. 1872.)を和訳した加藤斌(なかば)訳『商家必用』(新民社)は、同じ明治 6 年 10 月に初編二冊（単認(ひとえとめ)）、同 10 年 4 月に第二編二冊（複認(かさねとめ)）および付録一冊が出版されて完成した。先の福澤とこの加籐の著作は個人的な出版物でしたが、6 年 12 月に出版された『銀行簿記精法』（全五冊）は大蔵省版で複式簿記による実務書でした。

『帳合之法』は『銀行簿記精法』より半年早く出版されたが、『帳合之法』本式(複式)の部は『銀行簿記精法』に遅れること半年後の明治 7 年 6 月でした。この『銀行簿記精法』は当時すべての銀行実務(第一国立銀行に始まる普通銀行)を支配したこの国特有の簿記法となりました。

日本初の簿記用語の翻訳

福澤はのちに帳合之法の翻訳につき、「余が著譯書中最も筆を勞したものは帳合之法なり。舊幕府時代に一寸その原著を見たることあれども、餘り心に留めず、二三枚を讀で何か是れは金銭の請取書を認むる…思ひしのみ、其のまゝに捨置きしが、明治維新後に至りて横濱の一友人が新舶来の原著を携へ来たり」と語っています。

(1) Bookkeeping を「帳合(ちょうあい)」と訳したのは世間で使われていた「帳合わせ」でした。のちに「簿記の字をもちいざりしは、余り俗に過ぎたようで一般化しなかった」と反省しています。

Economics を「経世済民」経済と訳したり、Business を「商売」と訳し、account を勘定、credit 貸、debit 借など多くの用語を命名しました。

(2)帳合之法巻之一「凡例」で「本式」「略式」の和訳について苦心したことを綴っています。すなわち、原著ニアル「シングル・エンタリ」ノ字ヲ此書ニ略式ト譯シ「ドウブル・エンタリ」ヲ本式ト譯シタレモ此譯字ヨク原意ニ叶ウモノニ非ス「シングル・エンタリ」トハ一重ニ記スト云フ義「ドウブル・エントリ」トハ二重ニ記スト云フ義ナリ

この構想は加藤斌(なかば)の単認(ひとえとめ)、複認(かさねとめ)に影響を与えています。しかし、Double-entry を「本式」、Single-entry を「畧式」と銘じた用法は的を得ていました。西洋には純然たる単式簿記はなく、複式簿記(本式)を簡略にしたものを単式簿記(略式)と呼んでいたからです。

(3)福沢のもう一つの苦心は数字の書き方でした。当時アラビア数字はまだ知られておらず、そろばんの上では古くから十進法を実行していたのに、記数法は中国伝来の伝統的方法（十・百・千等の定位文字)を改めていなかった。そこで福澤は従来縦書きで壱萬七百参拾五と書くところを一〇、七三五と〇を作り、定位点を四桁ごとに付しました。

学制施行時のテキストとなった帳合之法

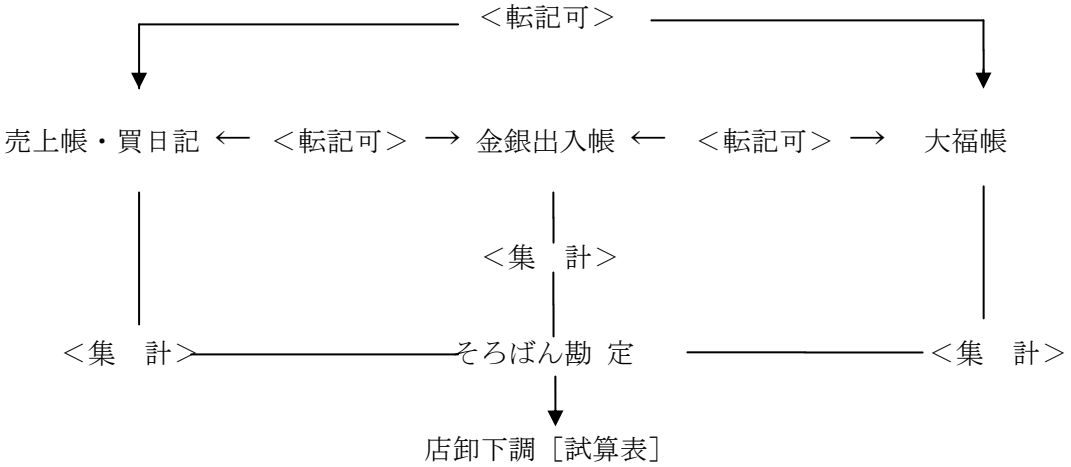
福澤は「明治六年の頃帳合之法を發行して、書物は賣れたれども、扨(さて)この帳合法を商家の實地に用ひて店の帳面を改革したる者は甚だ少し。聊(いささ)か落膽せざるを得ず。」と語っています。

売れた理由の一つは明治 5 年 8 月に発布された学制が原因のようです。この学制の学科目に記簿法（文部省の簿記に対する呼称)が入ったのですが、当時福澤のテキストしかなかったのです。明治 8 年に文部省版テキストが出来上がります。当時の文部卿は大木喬任でしたが、「文部省は竹橋(千代田区)にあり、文部卿は三田(港区)にあり」とのうわさがあったことから考えると、福澤の想い(帳合学)が「学制」に具現されたのではないでしょうか。

『帳合之法』の英語原本には「本式」(複式簿記)の部に一から四までの記帳事例を載せていましたが、福澤はその内の三、四の事例を訳出しなかった。その理由につき、同書二編帳合之法巻之四「譯者附言」に、其三例ノ如キハ略式ノ第三例ヲ本式ニ改メタルノミノモノナレバコレヲ省クモ妨アルコトナシ…學者若シコレヲ見テ不足ナリトセバ将来訳出して出版するもよしと書いています。問題は最後の第四事例にある特殊仕訳帳制度を使った呉服屋の取引例を訳出しなかったことです。おそらく原著者は最も重要と考えたに違いないのですが。

庶民になじみ深い江戸以来の「帳合」は多帳簿複(式)検算簿記でした。多数の補助簿(例えば金銀出入帳、売帳、買帳、大福帳など)にまたがる取引を重複して記録した後に、これらの帳簿記録を照合し合うことで、洋式簿記の勘定口座に代えて、「そろばん勘定(Accounts using an abacus)」が、取引の総計とその残高を即時に算出して店卸下調べ(洋式簿記の試算表に相当)が作成できたのです。翻って、第四例に示される帳簿組織(普通仕訳帳と現金帳並びに売上帳)は、この多帳簿検算システムに極似していたので、訳出されていたならば当時の商人もこれを厭わず、取り入れたと思われます。

簡素化した帳合構造



この和式帳合法(Japanese-style bookkeeping)は昭和の前期まで生き延びました。商人が洋式簿記法の知識を持たなかったからではありません。商業学校などで十分に習っていたけれども、中小商店は手慣れた和式帳合法で間に合ったからです。大正になると地場企業が一流企業に急成長し、近代経営の知識をもった人材を地方銀行から引抜くことが流行り

ました。この波に乗って、銀行で実践されていた簿記法がわずかに改変されて一般に普及、日本独自の伝票式簿記法が常識となったようです(小倉榮一郎稿『わが国固有帳合法の史的展開』雑誌『企業会計』1980 年 11 月号 p.228 参照)。

三冊の簿記書の構造

			仕訳帳		総勘定元帳		<日商簿記>
帳合之法	日記帳	→	清書帳	→	大帳	(貸借式仕訳法)……	基本簿記
銀行簿記精法	入金手形・ 仕拂手形・ 振替手形・	→日記帳		→	元帳	(現金式仕訳法)……	伝票会計
商家必用	補助簿	→	中仕切帳	→	仕切帳	……	特殊仕訳帳制度

福澤の落胆と理財の啓蒙

福澤は続けて「其實用に適さざるは尚ほ忍ぶべしとするも」新しい簿記法を採用したる者のなかには、商運つきて往々失敗したる連中も少なからず。どうも西洋の経済主義を知らなかったことに原因があるらしい、との思いから、明治 10 年 12 月に『民間經濟録』を刊行している。

維新後の国家行政や法制度、そして国の統治を担う官吏を養成するために法学が重要との認識から、イギリス法を講義する英吉利法律学校(のちの中央大学)、フランス法と日本法を教える和仏法律学校(同じく法政大学)、日本法を教授する日本法律学校(同じく日本大学)などの法学ブームが去る明治 20 年代になると殖産興業施策が花咲き、世は商学、経済学の時代がやってきました。こうした時代背景のもと、英学塾から出発し「実学」という名の、独自のリベラルアーツ的な高等普通教育機関として成長してきた慶應義塾は高度の専門教育機関の「大学」、すなわち、明治 23 年に文学・法律、そして理財の三学科をもつて大学部を設置しています。ここに福澤が熟慮した「実学」、商・工・農の学問こそが「実学」である、とする実学重視の時代がやってきました。この先頭に立ったのが慶應義塾大学理財科でした。

福澤先生は江戸時代に重要視された和漢書の暗誦を主とする学問を虚文空論と喝破し、商業、工業、計算学等を中心とする実学の重要性を説きました。そして、『帳合之法』こそ実学の中心であり、今後の日本経済発展の基礎となるものと考えたのでした。福沢がほぼ同時期に著した『学問のすゝめ』と『帳合之法』は、学問に対する理論と実際という関係では一対となっており、同じ精神で結ばれていたと言えます。

福翁が啓蒙した「帳合学のすすめ」を愚考しました。御清聴ありがとうございました。